

特集

移住女子

五味 希

移住女子のデータ

名前：五味 希
出身：東京都
年齢：23 歳
移住した年：2012年8月
住んでいる地域：
新潟県小千谷市塩谷
移住のきっかけ：
にいがたイナカレッジの
インターンシッププログラム(1年間)
いまの仕事：
東山地区振興協議会にインターン中
好きな男性像：
目標に向かってる人！
座右の銘：やらぬ後悔よりやる後悔
休日の過ごし方：
ドライブ・サイクリング
好きなむらのご飯：ちまき(きなこ)

私は、「にいがたイナカレッジ」の一年間のインターン生として、新潟県小千谷市東山地区へやってきました。「地域の視点を学びたい！」それが新潟へ来た一番の目的でした。

学部では観光や農業に関するまちづくりを学び、まちづくり研究サークルにも所属しました。「住民にとつての『まちづくり』とは何か」そんな問いを心に留めながら、中山間地をはじめとする地域を訪れてはヒアリングを重ね、活気を取り戻すには何が必要か、学生にできることは何かを議論していききました。各地を訪れる中で、地域を誇りに思い、逆境を乗り越えようと奮闘する目の輝いた大人たちとの出会いがありました。この人たちのエネルギーはどこからわいてくるのだろう、どうやって地域の人を巻き込んでいくのだろう…。

「もっとまちづくりを学びたい…」

もつとまちづくりに対する見識を深めたいと思い、大学院へ進学しました。そして、たまたま見つけたインターンの募集「地域づくりを住民と一緒に考えてみる」、このフレーズに惹かれて「これだ！」と思って応募。今思うと、その直感の間違っていませんでした(笑)一年間滞在する中で、数え切

れないほどたくさんの方の「魅力に感じるところ・好きなところ」が見つかりました。例えば大みそかの神社のしめ縄作りに参加した時、村の男衆が集まり、藁から大きな縄を作る。雪が降りしきる中、「木遣り」と呼ばれる歌を歌いながら神社へと奉納へ向かう。代々続いてきた村の歴史のページを、今、同じ空間で共有している、それは私にとつてとても感動的な出来事でした。一方で、今年で九年目を

迎える中越地震の残した傷跡、人口減少、葛藤、人口の減少：地域の抱える課題もよく見えてきました。どうすることが一番良いのか、それはとても難しいことで、村の人曰く「答えはない」のかもしれませんが。

住んでみなければわからない、そんな地域の良いところ大変なところ、それらを日々感じながら、毎日がジグソーパズルのピースを見つけては、はめていくような感覚。いろんな人の話を聞いて、少しずつ少しずつ地域を理解して、そして全体が見えてくる。その繰り返しです。

普段は、地域で行われるイベントの手伝い、「地域の将来を考えるきっかけとなる」住民アンケートの実施や、地域の女子会開催、忘れられつつある昔の暮らしについての聞き取りなどを行なっています。外から来た者として、地域のどこに価値を見出したか伝えたい、そして、

いつか外からこの地域へ来るかもしれない人へバトンを渡したい、そんな思いを込めて「これを読めば東山がわかる！」地域の出来事をまとめた冊子作りにも取り組んでいます。それが一年間、本当に貴重な経験をさせてくださった地域の方々へ、わずかばかりのお返しとして、自分の果たせる役割なのではないかと思っています。この一年の経験を、「良い経験だったな」と終わらせるのではなく、将来「地域の視点と都市の視点」どちらも持ち合わせた人間として、社会に貢献するためのスタート地点としたいのです。



大みそか、しめ縄を担ぎ、村の鎮守様へ向かう(塩谷集落にて)

国重要無形民俗文化財である牛の角突き、牛の散歩へ同行(朝日集落にて)

特集

移住女子

栗原

里奈

移住女子のデータ

名前：栗原 里奈
出身：千葉県
年齢：27歳
移住した年：2012年4月
住んでいる地域：新潟県長岡市
移住のきっかけ：
「生きる力を養いたい」
と思っていたから
いまの仕事：地域プロデュース
（地域の魅力を発掘して、イベントやツアーを通して都市部の人に伝える）
好きな男性像：やさしくて強い人
座右の銘：
勇気一秒。後悔一生。
休日の過ごし方：畑仕事
好きなむらのご飯：山菜の天ぷら

私は結婚を機に移住したので、必然的に来ざるを得なかった」と見られますが、もともと「地方に移住したい」という気持ちがありました。

私は千葉県松戸市というベッタタウンに生まれ育ちました。夏休みはよく静岡の親戚の家に両親に連れて行ってもらいました。江戸時代に建てられた親戚の家の縁側が大好きでした。外から吹き流れる優しい風、鳥の声や葉のかすめる音、そこで流れるゆったりした時間。今でもその感覚や時間を覚えています。しかし、自宅に帰ると周りは家ばかり。ゆったりした時間を過ごす場所や余裕も感じられませんでした。「縁側のある家でゆったりした時間を暮らしたい」という気持ちは芽生えていました。

短大を卒業後、機械を直す仕事に就きました。機械があるところはグレイアウトな世界。

ができるのではと考える様になり、移住の気持ちが一層高まりました。

結婚を機に新潟県長岡市に移住してきましたが、移住希望先である川口には空き家がなく、仕方なく長岡の街場に住んでいます。私たち夫婦の夢は「川口に住むこと」。今は川口に畑を借り、行き来しながら空き家を探しています。来年は田んぼを借りれることになりました。自然に沿った豊かな暮らしを実現できるように、そして、地域の風土を継承して次世代に伝えられるように、少しずつ歩みを進めていきたいと思っています。



集落のばあちゃんが作ったお茶のパッケージと一緒に考えました。

「結婚は移住する手段？」

灰色と黒ばかりの環境でずっとお仕事していると、目が自然と緑のものに向かうようになりました。そんな折、自然を体感したいという目的で岩手県遠野市のツアーに参加しました。馬搬職人さんが新月に切った木を、馬を使って山から降ろす伝統の作業（地駄引き）を見たり、休憩時間に職人さんが雪上で火を焚いて、沢から汲んできた水を沸かしてコーヒーを飲んだりするなどの体験をしました。職人さんとしてはなんてことないことかもしれませんが、火はガスコンロのスイッチを押して出すもので、お水は蛇口をひねって出るものという頭があったので、衝撃的なことでした。この経験から「自然にそった暮らしをしてみたい」と強く思う様になりました。

山の匠に教わって山の暮らしを楽しんでいます。

最後に、移住の気持ちを強くした背景には、東日本大震災があります。震災後、スーパーにお米を買いに並んだら目の前で売り切れてしまつて「このままではだめだ」と思いました。この経験は物流に頼った都会の食糧維持の脆弱性を強く感じると共に、都会に住むことは生きる力を奪っていくと感じました。平成十六年の中部地震で被災した新潟県長岡市川口のある集落では、道が寸断されていて自衛隊が入れなくても、自分たちがつくったお米、野菜、保存食で十分に食事ができたり、亀裂の入った道路を自分たちで直して自衛隊の人が入れる様にしたりしたそうです。

遠野や川口で生きる力の強い人たちに出会い、「何かを自分でつくる力、何かを自分で考える力は、生きる上で大切だ」という想いを強くしました。そして、それは地方でこそ養うこと

特集

移住女子

移住女子のデータ

名前：坂下 可奈子
出身：香川県
年齢：26歳
移住した年：2011年2月
住んでいる地域：
新潟県十日町市池谷集落
移住のきっかけ：集落で行われていた農業体験をきっかけに
いまの仕事：農業、NPOからの委託
好きな男性像：
さあ～ずの三村みたいな！
座右の銘：おらがおらがの我よりも、
おかげおかげのげで生きよ
休日の過ごし方：
おいしいものを食べてます
好きなむらのご飯：魚沼コシヒカリ

坂下 可奈子

はじめまして、坂下可奈子です。香川から、大学で上京し卒業後平成二十三年に豪雪地帯の十日町市池谷集落に移住しました。

大学では、法学部政治学科でアフリカの紛争解決が専門。当時は、どうしても戦争や紛争がなくなり、平和を作れるのだろうと考え、ケニアやルワンダにも行きました。

しかし世界という大きな単位から変えようとするのでなく、まず日本の小さな単位をよくすることが、大きな幸せに繋がるのではと思うように。そして欲望やエゴが渦巻く紛争の中いながら、地域をよくするのは「ころ」なんだと気付きました。

そんな中、JENという国際NGOに出会いました。当時彼らは池谷集落で中越地震からの地域おこし活動をし、その農業ボランティアに私は参加し池谷と出会いました。

！価値観を変えた
池谷集落！

当時六軒十三人、半数以上が七十代のおじいちゃんおばあちゃんの集落との出会いは衝撃でした。そこにあるのは、山と農に生きる人たちの強く広い人間性、そして集落を存続させたいという強い思いでした。

東京にいたときはすごい大人は沢山いましたが、池谷ではこういう大人になりたいと思う人達に出会いました。

もう一つ、私の価値観を変えたものが。私は小さい頃からスポーツもよくし、よく食べ、太りやすい方だったので、女子としてはガタイもよくコンプレックスでした。中学からいろんなダイエットをし痩せては太つての繰り返し。周りに体型のことを言われると、今の私を否定されたようで私を見失い、痩せたい、かわいくなりたい…その乖離で苦しんでいました。結果、過食と拒食の狭間で、高校をくぐれて？行かなくなったときも。

そんな心を埋めるように、稼いでは高級ブランド品を消費するつまらないプライド人間でした。

そんな中、池谷に来るとごはんが本当においしくて、いつも食べ過ぎて。「あまた東京戻ったらダイエットしなきゃ」とつぶやいたとき、村の人が「なんで？いまのままでもいいのに」と言いました。「そうは言っても…」

けれど何度も通ううちに、作物が寄り添ってくるのです。池谷のブナ林から、私たちには計算も造形もできない仕組みの中で、豊かな土壌と水はゆっくり巡り、作物はそれを栄養に風に吹かれ、何度も星を見送り、何度も太陽を迎え、草刈りをする村人とともに、太陽にも炙られる。作物のその小さな体には、長い物語と沢山の風景、そして寄り添う人が詰まっています。その懐のなんと大きいこと。「日



集落の直販米「山清水米」の栽培もしています



早朝の朝霧の風景はどれも幻想的

特集

移住女子

移住女子のデータ

名前：渡辺 加奈子
出身：大阪府
年齢：31 歳
移住した年：2008 年 4 月
住んでいる地域：長野県栄村
移住のきっかけ：「むらの人みたいになりたい」と思ったから
いまの仕事：NPO 法人栄村ネットワーク勤務・農産物の直売・体験交流施設「あんぼの家」の企画運営
好きな男性像：栄村が好きな人
座右の銘：素直さと謙虚さと感謝の心を忘れない
休日の過ごし方：むらの父ちゃん・母ちゃんとお茶のみ、草刈り、料理
好きなむらのご飯：お米、あんぼ、塩煮芋（しょうにいも）

大阪生まれ、大阪育ち。栄村の人口は約二千二百人。住んでいた街の人口は栄村の約百倍、面積は十分の一。自然があるというには程遠い街で私は育ち、大学に行くまで「都会」の世界観しか知らずに生きてきました。

しかし、栄村との出会いで、「都会とは違う世界がある」と気づかされました。

栄村を知ったのは、大学での調査研究。その当時、社会は「ムダな公共事業」や「市町村合併」が問題になっていました。そんな中「自立をする村」と題する栄村の当時の村長高橋彦芳氏の著書を手にし、これを機に、私は栄村を訪れることに。

栄村のむらづくりに興味を持ったけれど、「栄村」そのものに惹かれていきました。大学を卒業後は就職し、休みのたびに大阪から七時間以上かかる栄村へ。

渡辺 加奈子

「栄村の人たち
みたいになりたい」

テーマパークもない、目立つた観光スポットもあるわけではない。けれど栄村に「通う」。ただ栄村の人たちに会いに行き、お茶のみしておしゃべりするのを楽しみました。

そうやって「通い」続けることで、栄村をより知ることになりました。

いままで食べたことのないお米や野菜の美味しさ、ほっとする自然環境、暮らしのすべてが自然に基づきその中で、そこから身につけている知恵と技術、共同の精神…。何よりも、よそ者の私を温かく迎え入れてくれる人たち。

栄村には、人も、時間も、「価値」や「優先順位」の基準さえも都会とは違う「世界（観）」があると気付き、いつしか「栄村の人たちみたいになりたい」

と思い始めていました。

「とりあえず一年住んでみたい」。そんな思いで仕事を辞め、栄村青倉集落へ移住。

地元のNPOに所属し、都市農村交流や、農産物の直売を行ない、もう五年がたちました。

この五年間で、小さいながら（手入れが悪いが）自家用のお米や野菜を作ったり、郷土料理もいくつか覚えめました。けれど、はたと気づいたら、最初に来たころと、村の様子は少しずつ変わってきています。

直接的には、平成二十三年三月十二日の長野県北部地震がある。急にじいちゃん・ばあちゃん達のパワーがガクンと落ちてるように感じます。

私が好きなのは、じいちゃん・ばあちゃんたちが繋いできたむ



あんぼの家でむらの食を学ぶワークショップも開催。

「あんぼの家」はそんな思いで作りました。古民家を拠点に、栄村の郷土食を学んだり、交流できる場を作る。いまはまだ駆け出しだけれど、「あんぼの家」を「受け継ぐ・繋がる場」にしていきたいです。

いま、栄村には若いインターン、リターン者が増えつつあります。その若い人たちと一緒に、栄村がずっと続いていく村へしていきたいと考えています。

スキー場から青倉集落を臨む